

宮城野小での特別支援教育

1 これまでの実践

本校では、平成 17 年度から、ひとりひとりのニーズに応じた適切な指導及び必要な支援を行うために、特別な配慮を必要とする児童に対して個別学習を実施してきた。昨年度からは、高学年教科担任制の実施に伴い、「全職員で支援の手を少しずつ」をモットーに、11 人の児童に対して、支援体制を工夫し、9 人の教師で個別学習（げんきタイム）を行った。その結果、児童は、個別学習でわかることを体験し、それが自信となって、通常学級において落ち着いて生活する姿が見られたり、自信を得て積極的に活動するようになったりという成果を得ることができた。

2 研究主題

通常学級に在籍する配慮が必要な児童への支援方法の工夫

3 主題設定の理由

学区内に、自衛隊官舎があることで、転出入が多く、1 年生から 6 年間で過ごす児童は、半数にも満たないことが本校の大きな特色となっている。そのため、随時各学年の児童の顔ぶれが変化し、勉強や活動が遅れてしまう子や授業中に席を立ったり声を出したりする子、うまく友達と関わることができなくてトラブルになってしまう子などが職員室の話題にあがることがよくある。

平成 18 年 7 月 27 日の「仙台市における特別支援教育の在り方について」（最終報告）では、「障害のある子ども一人一人の教育的ニーズを的確に把握し、子どもや保護者の意向を踏まえながら個別的教育支援計画を策定し、その計画を実現するために選択の幅のある指導の場を柔軟に提供していけるような教育を展開する。」とある。

また、今までの本校の特別支援教育の取り組みを振り返ると、特別支援委員会を組織して、特別な配慮が必要な子に対する支援について話し合いをもってはいたが、具体的な支援方法になると、担任がその子に対する配慮についてや医療機関や相談機関への受診をすすめるなどの方策で終わってしまっていた。

以上のことから、通常学級に在籍する配慮が必要な児童により具体的な支援体制を工夫することによって、本人が生き生きとした学校生活を送れるよう支援したいと考え、本主題を設定した。

3 研究の基本的な考え方

「通常学級に在籍する配慮が必要な児童」について

学習面、行動面、対人面に困難さのある子であり、この中には、LD（学習障害）、ADHD（注意欠陥多動性障害）、高機能自閉症と軽度発達障害の子どもたちを含める。このような子どもたちは、「困った子」ではなく「困っている子」としてとらえる。

4 研究の方法

(1) 研究全体構想図

資料 1 に全体構想図を示す。

(2) 研究の流れ

- ・ 気になる子や配慮や支援が必要な子に担任が気付く
- ・ 特別支援委員会を開き、担任から詳しい情報を得る。
- ・ 特別支援教育コーディネーターが作成した支援方法について特別支援委員会で吟味する。
- ・ 保護者への理解と協力を依頼して、その結果に合わせて、支援を実施する。
- ・ 特別支援委員会において情報交換および支援内容を再検討する。
- ・ 職員会議において悩みや成果を共有して、全職員で子どもたちを見守り、支援を行う。

5 研究の内容

(1) 気づき

毎年1月において、図1の気づきカードを全学級に配付して、気になる子、配慮を必要としている子、支援の必要な子を担任から報告してもらうようにしている。3年前は5月に実施していたが、担任がまだクラスの子どもたちの様子を詳しく把握することができない上に、その子にあった支援が夏休み以降になってしまったことを見直し、1月に実施するようになった。今年、11名の児童が気になる子として提出された。内訳は表1の通りである。この子どもたちについて特別支援教育コーディネーターと担任で話し合い、軽度発達障害の疑いが見られる場合は、チェックリストでさらに詳しく子どもたちを見つけてもらった。

	気 に なる 状 態 (平成19年1月)					
	広汎性発達障害	自閉的傾向	不登校無気力	乱暴	学力不振	その他
1年						
2年		1	1		1	
3年					5	
4年					1	
5年	1				1	
6年						
合計	1	1	1		8	

表1 ※この学年は前年度の学年である。

平成18年1月17日(火)
特別教育支援委員会

秘

気になる子の実態調査

先生方に「気になる子ども」についてお聞きします。該当するものに○をつけ、記入欄には、可能な範囲でお書きください。

記入者

1. クラスまたは、校内で気になる子どもはいますか。 いる いない
2. 「いる」の方にお聞きします。何年何組ですか。

年 組 名前()

3. 「いる」の方にお聞きします。その子どもの気になる状態に該当するものに○をつけてください。
(複数回答可)

番号	気 に なる 状 態	○記入欄	番号	気 に なる 状 態	○記入欄
1	かん黙		2	極端な引っ込み思案	
3	孤独、無交友		4	依存的、無気力	
5	乱暴、破壊的行為		6	激しい感情の爆発	
7	盗み、持ち出し		8	虚言癖	
9	夜尿、頻尿		10	極端な偏食	
11	指しゃぶり、爪かみ		12	チック	
13	登校しぶり、不登校		14	頻繁な頭痛、腹痛の訴え	
15	落ち着きのなさ、多動		16	学習の偏り、学力不振	
17	自閉的傾向		18	広汎性発達障害	
その他の問題行動 ()					

4. 「いる」の方にお聞きします。具体的にその子どもの様子をお書きください。
()
5. 「いる」「いない」両方の方にお聞きします。今、お困りのことがありましたら、お書きください。
()

※気になる子どもが複数いる場合は、この用紙をコピーして使用してください。

図1 気づきカード

(2)特別支援委員会について

①役割

- ・学習面や行動面で特別な教育的支援が必要な児童の実態把握を行い、学級担任の指導への支援方策を具体化する。
- ・担任または、特別支援教育コーディネーターから提出された個別の指導計画を吟味する。
- ・特別な教育的支援が必要な児童への指導とその保護者との連携について、全教職員の共通理解をはかる。また、そのための校内研修を推進する。
- ・専門家チームとの連携のあり方を検討する。

②構成員

校長	教頭	教務主任	生徒指導主任	特別支援学級担任	養護教諭	少人数指導担当
	対象児の学級担任		教育相談担当	特別支援教育コーディネーター		

③主な年間計画

月	活 動 内 容
4.5月	・構成メンバーの確認、組織の確認、年間計画について ・対象児の確認と支援体制の検討および保護者への理解促進のための方策検討
6.7月	・児童の状況について情報交換 ・個別の指導計画の確認 【校内研修会の実施】
8月	【校内研修会の実施】 「LD, ADHD, 高機能自閉症, 広汎性発達障害への理解」
9.10月	・児童の状況について情報交換 ・児童の支援内容の再検討
11.12月	・児童の状況について情報交換 ・実態調査の内容の検討
1.2月	・実態調査を実施し、その結果から次年度の対象児の決定
3月	・今年度の支援体制の評価及び次年度の方向性を決定

④特別支援委員会の活動の実際

気づきカードの結果を受けて、それぞれ担任が個別の指導計画(図2)を作成し、それを資料として特別支援委員会を2月に開いた。話し合いの結果、11名の児童に個別学習(げんきタイム)を実施する方針を立てた。11名の児童の担任には、保護者の理解と協力を得ることを要請して、保護者との個人面談を行うこととなった。

個人面談には、必要な場合は、特別支援教育コーディネーターも参加するようにした。

6 支援の場の提供(げんきタイム)

個別学習の時間を受けた本人が、わかった・おもしろかったという気持ちを持ち、やる気と達成感を得て通常学級にもどれるようにという願いを込めて『げんきタイム』と名付けた。本校では、昨年度改築工事もあり、教室不足のため、個別学習の場所を固定できないという実情があり、場の名称ではなく、時間の名称(げんきタイム)を採用した。

気づきカードの実態からもわかるように、本校では、学力不振の児童が多い。今までは、放課後の補習で補ったり、どの子にもわかる視覚的手がかりを加えた授業の工夫などで対応したりしていたが、なかなか難しいのが現状であった。そのため、まわりの子との学力差が学年が上がるにつれ広がる心配があった。また、授業中落ち着きがなく、出歩いたり、まわりの子に危害を加えたりという子の場合、担任一人では、一斉指導の場面で無理が生じていた。

そこで、2年前より特別支援学級担任が中心となって、個別学習に取り組むこととなった。さらに、昨年度より高学年教科担任制が本校で導入されたことを機会に『全職員で支援の手を少しずつ』を合い言葉として、9名の教員で個別学習(げんきタイム)を実施することとなった。今年度のげんきタイムのタイムテーブル(最新版)が資料2である。

それを日記風にし、担任と連絡のやりとりをしている例もある。

8 職員・保護者への啓蒙

本校の特別支援教育コーディネーターとなって3年になるが、その期間において、職員および保護者には、特別支援教育についての情報を機会をみつけては伝え続けた。特別支援教育コーディネーター研修の内容や他の研修会の内容などは、要点をまとめた資料(資料3)を先生方に配付して、『既製の教育から、オーダーメイドの特別支援教育へ』などと啓蒙につとめた。また、保護者には、4月のPTA総会の際に校長あいさつの中に特別支援教育についての説明を挿入してもらった。その積み重ねのおかげで、職員の意識改革が進み、『全職員で少しずつ支援の手を』をモットーにして、個別学習から全職員が関わらざるべきタイムとなった。

10 これまでの研究成果

(1) 教職員の意識改革

特別支援教育で、いったい何が変わるのかなか浸透しなかったが、職員会議において説明したり、資料を配付したりすることで、徐々に浸透して、配慮を必要とする子どもたちのために教職員が一丸となって、支援の手を差し伸ばすことができるようになった。

(2) わかる・できる体験の提供

個別学習(げんきタイム)によって、わかること・できることを体験して、それが自信となって、通常学級の学習や生活でよりよい方向に向かうようになった。このようなある意味における成功体験を積み重ねることは、やる気を呼び起こし、達成感を味わわせ、とてもよい効果を生んだ。今までみんなといっしょにいてだけでストレスの場となっていた教室での活動も、個別学習(げんきタイム)によって元気を得る場となった。また、担任にとっては、負担が大きかった一斉指導での個別指導も個別学習(げんきタイム)によって、負担軽減となった。

(3) 本校の実情に合った支援

高学年教科担任制と組み合わせることで、より深く、より効果的にその子に合った支援を行うことができた。また、空き時間のある教員の補助可能な時間割一覧を作成したことも支援を行う上でたいへん効果的であった。

(4) げんきファイル

個別学習(げんきタイム)の学習内容を記録したげんきタイムファイルを作成したことで、担当者と担任との連絡にとっても効果があったとともに、このような個人ファイルを保存しておくことで、学年が進級した場合でも引き継ぎがスムーズに行うことができるようになった。

11 今後の課題

(1) 個別の教育支援計画について

本来は、医療機関や他の機関と連携して、子ども一人一人の教育的ニーズを的確に把握した長期に渡っての個別の教育支援計画が必要である。さらに、子どもや保護者の意向を踏まえながらの支援計画にしなければならない。

(2) げんきルームの設定

げんきタイムの設定は、子どもたちにも教師にとってもそして、保護者にとっても効果的であった。今後は、時間だけではなく、場所(環境)としてげんきルームを設定し、そこでげんきタイム(個別学習)を実施するようにしたい。また、そのげんきルームでは、放課後の補習も各学年によって時間と担当者を決め、希望者に開放できるように設定したい。

「津波のように特別支援教育が押し寄せている」

2004. 9月27日(月)片柳

特別支援教育コーディネーターって、何をやるんだろうと漠然と思っているうちに研修会において、「法制化を待って動くのではなく、地域や学校でできることをどんどん進めておかないと」などと、花輪先生(独立行政法人国立特殊教育総合研究所 総括主任研究官)。

続いて、日本LD学会会長の上野先生が、「津波のように特別支援教育がおしよせている。学校をよみがえらせるこんなチャンスはない。」「1%の特殊教育から1割の特別支援教育へ」などと、こりゃあ、大変だと思ふ話ばかり。

また、「特別支援教育コーディネーターが中心となって、校内支援体制の確立を。」と教育相談課の先生の言葉。

どうしよう、早急に何かをしなければということで、まず今までの研修会の内容を先生方知ってもらおうことにしました。

通知表作成でお忙しいと思いますが、一段落着きましたら、ごらんだけいただけたいと思います。

II. 講義「配慮を要する子どもの理解」より

講師 東京学芸大学教授日本LD学会会長 上野 一彦

- 「1%特殊教育から1割の特別支援教育へ」
※従来の特殊教育の対象だけでなく、LD、ADHD、高機能自閉症を含めて必要な支援を
- 特別支援教育への転換とは
(1) ユーザー(子ども)の視点に立つ
(2) 既製服から注文服へ
(3) 多様な選択肢と柔軟な選択可能性
(4) 指導効果があつてこそ教育
- 特別支援教室の設置
通常の学級 → 特別支援教室
(学級担任) (支援担当)
必要な時間数
(特別支援教育コーディネーターを中心に学校全体での支援)
- 特別支援教育によって学校は変わるか
(1) 校内委員会が機能する条件とは
①学級の問題を学校の課題として共有する意識改革
・隠したり、放置していることはないか
・いじめ、不登校、学級崩壊の潜在要因となっていないか
②委員会・部会のスクラップ・アンド・ビルド
・就学指導委員会、障害児教育推進委員会、教育相談部会、生徒指導部会、教科部会など
③誰がコーディネーターをするのか
・コーディネーターに必要な3つのワーク
※ヘッドワーク、ネットワーク、フットワーク
・校長はサポーターではなく隣のコーディネーター

資料 3

(3)担当者について

個別学習によって支援を計画するには、「いつ」「だれが」「どこで」を決定しなければならない。その際、もっとも難しい点は、「だれが」という点である。本校では、特別支援学級担任の他に、研究主任、少人数指導担当、教科担任制講師、指導方法改善等非常勤講師、初任研担当、加えて高学年担任と総動員で週当たり22時間の個別学習(げんきタイム)を設定した。今後もこのような人員が配置されるわけではないので、その年の職員動向によって、担当者を確保していく必要がある。

